る。特に佛國における國家主義の擡頭は、佛國社會黨内における新社會主義の發生にて之を認識することが出來る。同運動の一代辯者は社會黨が勞働者の團結さへ出來たらと言つて廿年一日の如く焦つて居るが、若し夫が出來ても議會の多數は得られない、なぜならば夫が爲に中產階級、民主主義、國家といふ三者から社會黨が絕緣されるからであるといふ。他の一代辯者は資本主義者が夙に生る爲に社會主義の妥當するものを取容れて仕舞ひ、ファツシズムや、ナチに至りては、社會主義の眞髓を奪つて仕舞ひ、最早社會主義は年老いて青年を動員する力なく、强力政府の統制經濟時代に取殘され樣として居ると嘆じてゐる。兎に角社會黨の陣營より秩序・權威國家を口號とする分派が生じたといふことはよくよくその行詰りを語るものではあるまいか。

爾餘の各國においても特に青年の間に思想運動として、將又實際運動としてのファツシヨ、ナチ類似の運動は中々隆んであり、特に優勢を示さざるもその存在は地の鹽として爛れた社會に影響を與へて居る。（昭和九年八月）

第三章　階級鬪爭戰線と全體主義戰線

社會主義といふ言葉は非常に廣い意義を持つてゐて、之に定義を下すことは困難である。が、根本に於ては想定された資本階級に對する勞働階級の階級鬪爭を前提としての國際戰線即ち最狹義の國際主義を意味するものの如くである。マルクスが唯物史觀、資本集積說、階級鬪爭說を三大支柱として無產者の爲めの革命指導原理を編出し、勞働者は祖國を有せず——萬國の勞働者團結せよ、汝等は鐵鎖の外失ふべき何物をも有せず、汝等は世界を獲得し得べしと宣言して以來、勞働者國際協會が生じ、勞働者の經濟的利益の國際的連帶を高調して、民族國家の對立を空想だと說き、世界を縱斷する階級鬪爭の展開を期し、民族國家間の戰爭は多く勞働者の負擔に歸すると云つて、戰爭及び軍國主義に反對し普佛戰爭、普佛戰爭に對して抗議し、一般同盟罷業に訴へんことを慫慂したが、內訌の爲め十年にして存在を失つた。之が所謂、第一インタナショナルである。

一八七〇年以降、英、獨、佛、米に於て社會黨が結成され、一八八九年に國際社會黨大會が生じ、三年毎に會合して軍擴競爭に反對し、一九一〇年の大會には戰爭勃發阻止の爲め總同盟罷業を決行すべしとの決議が上程されたが否決され、戰爭の爲め其の存在を失つた。戰爭中には英國の獨立勞働黨、獨逸のリーブクネヒト一派の樣な非戰論者は投獄され、時には射殺されたが、多數の者は彼等の所謂「資本家の戰爭」の遂行に協力を與へ、社會主義的愛國者となつた。之が大體社會民衆黨の國際的結合たる第二インターナショナルであつた。而して斯の如き發展過程を示したのは勞働者に も慥かに國籍の認むべきものがあり、英國の熟練工の同職組合の樣な中產階級や、知識階級に接近して、流動性をもつ不熟練一般勞働者と比較にならぬ程高き安定せる生活を營む者があり、各國の勞働者は其の植民地の有無等の差で可成り異つた經濟的地位に置かれ、人種的、其の他の偏見等も强いので簡單には行かないと云ふ所から、マルクス主義を出でて一步自由主義に接近し、議會で多數を得て、卽ち政治的社會主義に依つて社會を改善せんと意圖した傾向の結果である。此の自由主義への過度の接近に對する反動として階級鬪爭の原則を把持し、社會主義者のコンモンウエルス建設に進むこと、之が爲に萬國の無產黨を糾合することを旗幟として、第二半インターナショナルが生れたが、間もなく第二インターナショナルに合同して仕舞つた。

二一九一七年ストツクホルムの大會に於て、第二インターナショナルより分岐して、露國共産主義者の指導の下に無産階級の專制社會主義的愛國者の放逐を標榜する、第三インターナショナルが生れ、アムステルダムに本據を有する第二インターナショナルと對立して來た。（サンヂカリズムは直接行動に依り、地方的に勞働條件の改善を克ち得んとする産業的社會主義で、國際的性質はなきも之を第四インターナショナルと呼ぶ者もある）

余輩は佛蘭西革命は政治的自由を求め、其の後の社會主義は經濟的自由を求めんとするもので、後者は前者の延長であると見るものであるが、後者が前者の存在に依り一面に於ては其の進展を保障されて居り、其の爲に所謂、ブルヂョアヂー階級なるものが貴族政治時代とは異なる意味に於て成立して來た。社會民主黨なる語の存在が其の證據である。所が社會主義もそう急速には進展せず、有限な工業勞働者も有能な者は出世もし、蓄財も出來る世の中であるから、保守的傾向も絶無ではなく、社會黨から出た政治家は大抵右傾し、中央黨化して其の經歷を終つて居る。從て第二インターナショナルに屬する各國の政黨は、二十世紀に入つては稍有力な反對黨又は政府の與黨として、其の政策の實現に多少の成功を示し、世界大戰後には絕對多數でない迄も第一黨として、此の陣營から多數の總理大臣を出すに至つた。此の時に至つては既に自由黨に序で新鮮味が失はれて來た。此の陳滯の空氣の中から議會內の政治的社會主義に依賴しない左翼の連中から、地方的に又は工場毎に産業上の鬪爭をやつて、より善き勞働條件を克ち得んとする、サンヂカリズムが飛び出し、露國ではあの國狀と大戰との影響で共産革命が成功して仕舞つた。

獨裁制と一言して貶し去る者もあるが、事柄は決してそう簡單ではない。ムツソリニ以前の伊太利政府の半身不隨の自由主義である國內には、サンヂカリストが跳梁する、勞働者も何の益する所なく、國家社會全體がたまらぬ、ムツソリニは社會黨の仲間から出ながらも考へた。歷史的存在である所の民族、卽ち全體と經濟上の必要である階級とは相剋せねばならぬか、夫れとも調和の道はないかと。彼は同志を糾合して、無政府サンヂカリストと市街戰を演じた。政府が當になすべくして、夫を爲す氣力も實力もなかつたことをムツソリニはやり遂げ、總同盟罷業を挫折せしめた。羅馬に進軍する以前に於て、彼は眞實の政府以上の政府であつたのだ。選擧制度や議會政治に當てはたまらないからと云ふ繩墨論丈けで、之が民主政治でないと云へるであらうか。彼れの全體國家に於て不勞所得者は發言權を失ひ、重き負擔を負はされ、勞働者は强い發言權を與へられ、實際上勞働爭議は勞働者の有利に解決されて居る。之を國民戰線と云ふて人民戰線に對立せしむるは人の勝手だが、自分は之を全體戰線と云ふべきだと思ふ。獨逸に於て、ヒツトラーが戰つたのは對外的には平和條約とユダヤ主義で、對內的には自由主義、社會民主黨及び共産黨であるが、此の外敵との戰がなかつたならば、彼は多分內敵を克服し得なかつたらうと自分は觀察するものである。之も立派な全體戰線である。人民戰線に對立する意味の國民戰線ではないのである。

蘇聯に關しては其の宣傳する理論よりは、其の實際と之を制約する民族國家の理法とから、自分は之を觀察することに決めてゐる。共産革命と云ふことはある一瞬に起る現象で、一度實行されて仕舞へば最早有産階級とか、資本階級とか、云ふものはないから革命は目的を失ふ。其の際、全部がプロレタリアートとなり、夫が支配者となるから、國家全體主義が發揚される。其の後に殘る共産黨は實に國家權力を掌中に收めて、爾餘の者を聊かでも搾取しようと云ふ特權階級だ。特に夫が閉鎖された政黨がある場合には特にさうである。さて共産が其の實を存するには、眞の個人主義的民主主義と結び附かねばならぬ。コンモン・オーナーシツプでなければならぬ。然るに此の要件を缺く獨裁國家に於ては、

殘るものは國家資本主義、官僚資本主義あるだけである。露國を共産戰線又は階級鬪爭戰線と見て宜敷しいか、頗る疑問となつて來る。之も全體戰線の一形式に過ぎぬかも知れぬ。余の目には獨露の對立と云ふものは、國民と人民との兩戰線の對立ではなくて、寧ろ依然として民族國家の對立のやうに見える。伊露關係に溝渠ありとしても矢張り之れ以外のものとは思はれない。此の民族國家の對立に制約されればこそ、蘇聯の外交政策の轉換が行はれ、聯盟に入り、歐米接近、憲法改正、佛蘇同盟締結が實現され、其の歸結として第二、第三インターナショナルの協力、即ち人民戰線結成の是認となつたのではあるまいか、民主主義の進んだ國で左派聯合が勝つのは往々其の傾向であつた。第三インターナショナルは昨年の決議で、之を是認し强化したに過ぎない。現實の問題としてフランスに於ては大革命、人權宣言以來傳統的に自由主義的傾向が强く、共和民主・左派共和、獨立急進の諸黨が形成する右翼聯合の議員が、左翼の三七八名に對する二三七名に過ぎなくて、他國に見るが如き保守的迫力を示さない。これを院外から支持するものに、ロツク大佐の火の十字團や、アクシオン・フランセーズありと雖も、彼等は國民の血を湧かす對外的スローガンを持たず、有産階級や既成政黨との因緣關係で、小ブルヂョアヂー等の新興大衆の全力を動員する魅力を缺いてゐる。從つて急進社會黨、社會黨共産黨等の左翼聯合が最少限度の社會綱領に一致し、共産黨も獨逸の共産黨の分裂の歷史に學びて、自由主義者、社會民主主義者、智識階級を引摺るの態度に出で、勞働總同盟や、統一勞働總同盟が院外から之を支持して居るに對しては到底太刀打出來ない地位にある。卽ち佛國國內に於ける國民、人民兩戰線の對立に於ける後者の、壓倒的優勢は之を如何ともすることが出來ない。夫は但し佛國の國情の然らしむる所で、他國がさうであらねばならぬ理由はない。西班牙に於ては保守的な貴族、資本家、地主、僧侶、職業軍人等の階級が尙相當優勢で、プリモ・ズ・リベラや、サモラは右翼革命政府を維持したのであるが、勞働者、農民、小ブルヂョアヂー等の新興大衆の全力を動員する急進左翼、左翼共和、社會黨、共産黨、アナルコ・サンヂカリストの結成する人民戰線には抗敵し難く、選擧に於て一敗地に塗れた結果の是正の爲に右翼の叛亂が最近勃發した次第である。此の國では聊か比較的優勢の人民戰線に國民戰線が對立して、双方共今や半ば固定的の戰線を死守して、屍山血河の慘劇を演じて居る次第である。目下叛軍の優勢が寧ろ報ぜられ或は叛軍が終局の勝利を占めるに至るかも知れないが、其の場合とて革命政府の前途も亦安心のものではない。

さて余の有する課題は必然獨、伊而して或は英が、プラトニツクな同情を西班牙の國民戰線に寄せ、同樣な意味で露佛或は英が人民戰線に同情を寄せ、西班牙の內亂が互角の形勢——之は西班牙內亂の著しき特色である。希臘の場合などは軍大局面に會したものの多量の流血を見ず支那式に終つてゐる——永續するに連れ、列强が次第に熱情を發して之に釣込まれ、遂に歐洲一般戰爭になるのではあるまいかと云ふ問題である。西班牙は世界大戰に於ける中立國であり、其の後の政策も中立國で、歐洲に於ける現狀維持派と打破派との兩陣營には加つてゐない。まづ人民戰線が勝つて其の天下が續けば佛蘇の外交が伸び、反對の場合には獨伊の外交が伸ぶるに違ひないが、此の場合とても獨伊には併行兩立する希望があり得ても共通の目的は一寸見附からず、西班牙の對岸植民地を伊太利が萬一隱斷することさへ、獨逸に取り一概に愉快なことではあるまいと思はれる。歐洲に於ては現狀打破派と維持派との對立こそ本質的であつて、其の準備がまだ完成して居らんから歐洲一般戰爭にはならないと思はれ、唯西班牙內亂を契機として其の前哨外交戰が展開して居る程度と見るべきものであるまいか。

之を要するに西班牙に國民戰線と人民戰線との對立があり、歐洲列强中、其の何れかに感情的に同情する國はあるが

國家が、具體的利益を期待せずに感情に從つて行動することとは思はれず、全歐を貫通する歐洲一般戰爭の前提として
の國民戰線と人民戰線との兩陣營の對立はまづないと余輩は觀察する。從つて此の機會に於て、西班牙の內亂を契機と
して歐洲一般戰爭に發展する如きことは九分九厘ないと斷ぜざるを得ない。武器供給問題で葛藤があり、英・佛側の不
干涉政策が獨伊の卽時の贊同を得なかつたにも拘らず、結局落着くべき所に落着き、列强は今迄の援助をやめずに日和
見に轉ぜんとして居るのは其の當座の證據である。

若し夫れ我國に於て人民戰線の胎動を擔任し、要望し、豫言する者あるに至つては彼等の歐洲事情一般は勿論、我國
の特殊事情に付ての極端な認識不足を憐れまざるを得ない。左樣な戰線が日本の社會、社會層の分野、傳統精神、國體
國際環境から見て寬容される筈もなく、西洋と異つて合法共產黨と云ふものがあり得ないから人民戰線はあり得ない。
唯一の無產黨たる社會大衆黨は、聊かながら有產者の代辯者と認められる自由主義的既成政黨とは到底握手出來得べく
もなく、事實上社大黨のスポークスマンの言說が立證する如く、彼等は寧ろ院外の右翼勢力、俗に所謂ファッショ的勢
力に呼びかけんとして居るのであるから、我國には人民戰線が現れて國際的人民戰線に協力すると云ふが如きことは掴
つてもあり得ない。

結論として佛國や、西班牙の國內に於て國民戰線と人民戰線とが對立し、後者は目下の處比較的優勢であるが、全歐
を貫通して左樣な對立關係は適確には認められない。寧ろ國家主義の强い全體戰線と階級的國際主義の强い階級鬪爭戰
線とは併行して存在して居るが、此の兩者間には多少の交涉はあり得ても、夫は歐洲を兩陣營に分つ分水嶺とはなり得
ない。國民戰線にまれ、人民戰線にまれ、階級鬪爭戰線は國際政治に於ては、刺身のツマ位の役割を演じ得るに過ぎま
い。（昭和十一年八月）

第四章　社會主義の民族化

熟々人間社會の現象を觀察するとき、我々はそこに生命と規範との葛藤を見出す。規範が生命に有利である場合、そ
こには何等の問題もない。英米國際主義を進展させた英米兩國に、內的疾患は暫くおき、何等外交上の深憂がない所以
である。右兩者が兩立しない場合生命が破壞し退嬰するか、然らざれば規範が破れて行く。而して生命らしき生命であ
ればある程、その規範を克服して行くものである。最近數年間に不戰條約、九國條約聯盟規約、ロカルノ條約について
吾人が目擊した通りである。しかして今この古き眞理の開展を、新歐洲とか新秩序とかいふ言葉に現された歐洲列强の
運動、特にスターリニズムの內に發見する。

生動する人間といふ言葉は、スターリンがスターリニズムの表看板に揭げた文句である。人間が生動する限り、イデ
オロギーでも又その客觀的に定型化された表現たる法律制度でも變化して行くに相違ない。ロシヤに於てマルクスのイ
デオロギーより、レニニズムを經てスターリニズムに落着く過程において生動する人間は、又も人間性の威力を示した
其處に社會主義の社會化民族化、又は人性化とでもいふ現象を吾人は發見する。この際吾人のいふ人間とは觀念上の唯
物人間ではなくして、全部人間の內部に棲息する常任恒久の生物人間、經濟人間、（中間史觀に該當するもの）、倫理人
間等の綜合人間のことである。

日本における從來よりの多數の露國通、特に極東シベリアの事情より歐露の全貌を推さむとする人々の描くロシアは次の如きものである。

露國は僅々二百萬人の黨員を有する共産主義者の獨裁政治の下に呻吟して居る。物資は缺乏し人は飢餓に迫つて居る政府に對する不滿は全般的にして强烈である。この狀態の下において露國が動員したり、戰爭したりすることは全然不可能である。露國は恐らく遠からず崩壞するであらう。

此の理論を極端に推す時は、日露不戰條約は露國のみに利益であり、露國がその國土を保つは隣國の恩惠寬典に依るといふことになる。此の見方は或は過去において共産主義が行詰りを生じた時期において或に極東地方のみにおいて、或は今日において極めて一部的にのみ妥當する見解であつて、露國は最早マルキシズム、レニニズム治下の露國でない吾人は其處に生動せる人間がその運命の開拓に向つて努力して居るといふ事實を發見する。

社會主義者でも、その他の社會改善論者でも人間を解放し、その文化生活を向上せしめ樣と思索することは賞讃すべきことである。

マルクスは、その思索の經過において貧困の一切の責任を物質經濟財貨、卽ち私有財產といふものに嫁し、資本がなければ私有財產がなければ人間は解放されると考へた。露國において貴族、大地主、資本家といふ所謂搾取者が、マルクスのいふ樣にアベコベに搾取否沒取されるといふ事實が起つた後人間は夫丈けで解放されたか。事實上之丈けの改革では人間は解放せられなかつたばかりか、その生活は一層惡化して行つた。何故か。人間の解放には人間の本性から來る制限がある、自然界から來る制限がある、クロポトキンは此の後者の制限を打破しようと思索した、この前者の方は

マルキシストがそのイデオロギーの本質上立入ツて觸れ樣としなかつた點である。此の問題に觸れた者の內認識の穩健な者は社會平和を好み、修正派として社會民主黨に奔り、ギルドソシアリズムに走り、過激なる者は鬪爭を好みサンヂカリズムに奔つた。

今日吾人が目擊するロシアは如何なるものか、政府は世界の到る處に發見せられる寡頭政治である。組織されたプロレタリアもなく、プロレクリアの專制は尙更存在しない。政府はマルクスの後繼者が見た樣に官職を爭ふ一團のインテリゲンチアの集合である。親讓りの貴族富豪といふ背景を持つ老年のインテリゲンチヤに代ふるに、貧困、失意、勞苦を經た若き鬪爭力あるインテリゲンチヤを以てしただけである。マルキシズムが失意貧困の青年を鼓舞し、彼等に依り天來の福音の如く渴仰されたことは重大なる一事である。マルキシズムを國家に施してよいか、どうかは全く他事である。前者の意味においてその影響として、露國は徒食せる貴族富豪よりその資產を沒收した。今日この富豪貴族の爲に悲しみ、復辟運動を企てんとするものは一人も見當らない。反對に制度として國家に施されたマルキシズムは如何といふに、夫は到る處に生動する人間の前に退轉して居る。共産主義下の資本は民主主義國家の國有でなければならないのに、無產階級の專制は存在せずして知識階級の專制である。今ドイツの官吏が擧げてナチスに加入した樣に、露國人は皆共産黨に加入せんことを欲するが加入させてやらない。之は共産主義の基礎そのものの否定である。働かぬ者は喰ふべからずといふスローガンは社會主義に獨特のことではなく、或る程度迄自由主義にも社會道德にも共通のことである。よく働く者が高き地位を占め、衣食住共大なる滿足を得るといふに至つては、何等社會主義の痕跡を留めない。況や智能の優れたる青年が支配階級に入り、その受くる稍多額の俸給が同時に渡される一冊の帳面の威力によつて、金留の

換言すれば紙幣一留二十六錢が一米弗の購買力を持つといふに至つては、既に非社會主義の極端なるものである。精神力の優越に何等かの價値を賦與するとすれば、それは個人主義、資本主義、自由主義より流出する精神であつて、何等社會主義的のものとは認め得られない。胃の平等物質的分配の平等が、マルキシズムの心髓であらねばならぬ。精神的不平等を神聖化し、物質的不平等を以てこれを保障するが如きは生動せる人間による社會主義の克服と認めなければならない。

露國に於ては一切の商工業が根本に於て國有公有である。官吏又は之に近き者が之を支配するけれ共右國家の所有は統すれども治せざる如きものである。所謂資本主義國の所有に代ふるに支配を以てした丈けである。況や所謂資本主義國においても大企業になると物理的所有は不可能で唯支配する丈けである。何處に資本主義國と蘇聯との間に根本的の相違があるか、自助に依りて救はれざる者は、所謂資本主義國に於ても露國においても等しく救はれない様である。況や各企業に經濟主義を適用して互に競爭し、利潤を大ならしめんと努めしむるにおいておやである。これに類する傾向は農村においても亦認められ、人間の本能は露國の更生の爲に貢獻せんと振ひ起ちつつある。歐露において物資の缺乏が著しく緩和されんとする所以である。

然らば今の蘇聯と、爾餘の諸國との差は鮮少なる形式の問題となつてくる。一切の革命は革命と名を付くべき程革命的でない。フランス政府の一局には今日でも貴族名簿があつて、右の局はその系圖を整理する任務に當つて居り、舊家の名を潛稱したとかしないとかの訴訟さへ頻繁に行はれる程である。卽ち爾餘の國においては私有財産が大部分で、その基礎の上にある見地よりすれば、不合理な競爭が行はれて居るに比し、共産革命の功勞者といふ特權階級を除く外露國においては一切人が同一足場に立つて、裸一貫で一代限りの、見様によつては合理的の競爭をやり、國有財産の支配者としての地位を爭ふといふことである。しかも競爭に勝つ者は常に優れた精神力の優者である其處には特に社會主義的の何ものも存しない。誰か將來今日青年共産黨員結社、コンソモルに屬する優秀の青年が舊時のブルヂョアヂーの美女と結婚して局を結ばないと斷言し得るか。

家族制度の關係上相續財産が國有市有に歸することは西洋には珍しくない。壽府の公園を散步しても、吾人の目に付くことである。或は相續稅の重き爲に、或は遺族の存しないために、或は政府の何等かの政策が經濟不況の爲に私有財産が多くの國有市有財産に轉換した場合を想像すれば、今日のロシアと競べて決して根本的に異つた所はない。今や露國を動かしつつある過半數を占むる共産國の青年は、その本能の發揮に充分の自由を與へられ、恐らく現制度を謳歌し、その下に在りて國家に貢獻しつつ自己の榮達を企圖せんとして居るのである。社會主義の生動せる人間に依る克服でなくて何であらう。今の制度がかくて確立しながらも、共産革命の本質的制約を受けて民族化も充分出來ず、今の青年が壯年老年となる頃には勿論夫以前でも、次代の青年は又何等かの革命のスローガンを見出して社會革命を企てること火を睹るよりも明かである。

共産露國は曾ては、コーランが劍かといつたやうに、そのコミンテルンを通じて文書、ラヂオ等に依る宣傳を試み、一度は劍を取つて波蘭に侵入した。併し何れも效果を奏しなかつた。五年計畫は國際社會主義を拋棄し、一國社會主義は轉換した後の産物である。我國に於では今日もなほ露國の宣傳工作を恐れる傾向が強いのであるが、クレムリン宮內の支配者達は恐らく對外宣傳なぞといふことはあまり強く考へて居ないのではあるまいか。吾人はスターリン以下の指

導者が百戰練磨の苦勞人で、無駄な標的に向つてドンキホーテ的突貫をするやうな馬鹿者でないといふことを記憶せねばならぬ。此處にも社會主義の民族國家化といふ傾向を如實に認め得る。その殘餘は社會主義といふ方がよいか、國家主義といふ方がよいか非常な研究問題であるのである。

親じ來れば日本に於る從來の露國觀は一部修正せられねばならぬ。露國の共產政治は續くかどうか、一般の不人氣の爲に寧ろ顚落するものと假定して何時右政治は倒れるかどうか、之が吾人の日本において度々接した設問である。今日更生せる露國を見るとき名は共產主義にして、實は共產革命の痕跡を留むる官有財產を主義とせる露國は、多分永續すると考へられる。今後政變ありとするも、夫は或は有機的の開展に過ぎぬやも知れぬ。國外にある白系露人は無力にして凋落せんとし、次代の者は一部は新無產者として露國に歸つて競爭に參加するであらう。今日においては露國內に分離運動や反革命運動やは充分之を認め得ない。吾人の面前に立てる、而して吾人が取引をしなければならぬ露國は實に斯の如きものであつて、強くはないが弱いものではない。經濟的に悲鳴を擧げつつある米國が一見之と取引を急ぎ、モロトフの氣焰が強調を帶ぶるは、何等かの消息を傳ふるものでなくてはならぬ。

スターリニズムの露國、ヒツトラーイズム將又全部國家主義のドイツ、フアシズムのイタリー、國家本位、秩序、權威を口號とする佛國社會黨內の Neo-socialisme 運動を以て全歐の政治經濟機構は一大轉換を完成せんとしてゐる。これを社會主義の退嬰、中間形式の擡頭と見るべきや、將又マルキシズムの淸算と見るべきやは、學生諸士の研究問題に殘すこととして、兎に角次代を背負つて起つべき靑年は、この所歐洲の大勢が物眞似の好きな我國に深甚の影響を既に及ぼし、將來一層及ぼすべきことを覺悟し充分これに備ふる所がなくてはならぬ。（昭和八年十一月伯林の客舍に於て）

第五章　世界の大變革

昔の貴族や富豪は門戶を飾るとか門構がよいとか云ふ言葉が證明する樣に、肝腎の御臺所は左迄で豐滿でない場合にも不必要に外觀丈けを飾つたものである。それだのに最近では世の成金者流すらも心してか、門構や玄關を反て小さくして、其の反對に門外漢の目に觸れぬ內容を整備すると云ふ樣な傾向に進んで來て居る。謂はば我國にてはある間敷最惡の場合を豫見して、英首相ボールドウインの云ふた、「誇示的ならぬ富の使用法」を實行して居るものと云ひ得るのである。それだのに佛國の左黨は此の目に觸れぬ內容を有閑財產とか云ふて評稅しようとしてゐる始末である。

外國で度々我々は有福者達が互に話し合つて居るのを聞いた。今日は社會主義の時代ではないか、そんな豪奢な召使の澤山入る馬鹿な門戶を張る樣なことをするなと。斯て外國の大都會でも幾分は東京でも—分讓地の例が示す通りに—富豪の多數の召使を必要とする獨立家屋は次第に拋棄されて、在外公館や料理屋やホテルや俱樂部に轉用されて、其の舊主人公は轉落を、喫せない場合でも簡素な經濟的なアパート生活に移つて行つた樣である。

實際我々は埃及ピラミツドや、希臘のアクロポリスや、ヴエルサイユの宮殿や、萬里の長城などは昔時王朝時代又は封建制度時代の遺物であつて、未開野蠻時代の專制君主のみが之を爲し得たことで、將來は又と斯樣なことは繰返されまいと一應も再應も考へたものである。

併して歷史は如何なる方面に於ても繰返へされて止まぬ。成程そこに大衆の又は民族全體の利益とか、パブリツク・

ユーチリチーとか云ふものの觀念に就ての多少の變容はこれを認めねばならないが、兎に角最近に於て途方もない大土木建設事業が可能にもなつて來たし、又實際遂行されもした様である。斯くて我々は到る處に民主主義的ピラミツド、大衆的萬里の長城の聳立するのを見る様になつた。斯様の大事業は所謂ファツショ的國家に於て最も屢々之を見るのであつて、是非長短の問題は暫く措き、議會政治の行はれる自由主義國には此の事實を目撃しないのである。此のファツショ國家の大建設事業と之を産み出す國家組織所謂全體主義國家の出現とを併せて、筆者は之を「世界の大變革」と名附けるのである。そして我々は不知不識の間に其の重壓下に在るのである。所謂非常時の遠き背景は斯の如きものなのである。一二の國で重工業軍擴迄加味して大建設事業が始まれば他の隣の國にも飛火して「大建設事業國際」とでも云ふ世の中になるのは當り前のことであるまいか。

大建設事業の本家本元は蘇聯である。我々は世界の勞働階級の祖國であり、國際共産黨の住所地である露國と、ファシズム伊太利、國粋勞働黨の獨逸を正反對不倶戴天の存在として考ふることに餘りに慣れて居る。夫は或る程度まで經濟的の現實である。階級特に勞働無産階級を捉へて其の國際團結を說く前者と、傳統的存在である民族全體を揚ぐる後者との間に認められ得る差別である。所が此の差別たる實は心意上論理上の事であつて、實際上は蘇聯と獨伊との國家運營は著しく接近し、筆者は兎に角生産手段國有化を經た蘇聯を完全全體主義國家と云ひ、有機的に發展した獨伊を準全體國家と云ひたいのである。蓋しマルクス共産主義一般と其の適用後の國有國營國家資本主義國、政治政權と經濟政權を合せた獨裁國家とは根本的に相違し、人民戰線と國民戰線と對立的に考へられるに拘はらず蘇聯と獨伊とは相似の點を持つて居るのである。

斯く觀察して露國に於ては今迄の私經濟の大部分が國家財政の內に取容れられて、爲に歲入歲出は一千億、其の軍事費は二百五十億留にも及ぶとの事である。一切の生産手段や企業が國有國營となり、一切人が勞働の質量に應じた賃銀を受くる勞働の義務を負ふ勞働者と爲り、國家が獨り勞働供給者となり、所謂計畫經濟が行はれるから前迹の大變革は一層徹底的ならざるを得ない。蘇聯の外人通路を通つてなりともモスコウに滯在した者は郊外の多數の住宅、市街の中心地の尨大なるホテル建設事業壯麗筆ひなき地下鐵に喫驚したであらう。第一次、第二次の五ヶ年計畫を經て諸重工業都市の建設、モスクヴア、ヴオルガ運河、バンフ鐵道、邊疆諸鐵道、西伯利亞鐵道複線工事の完成を見るに至つて居るのである。此の點で秦大佐の「隣邦ロシア」を引用するのは蓋し適當であらう。

革命後の露西亞に於いても同樣である。變つた形で突飛な計畫や、遠大な理想を着々實現して居る。—勞働獨裁を標榜する現在の露西亞ではより一層封建時代に彷彿たるものがある。例へばバルチツク海レニングラード附近から白海に通ずる大運河である。第一次五年計畫の間、ゲー・ペー・ウー劍附鐵砲の脅威下に罪人や强制勞働者を使用して建設したものであつて、運河建設の主務官廳がゲー・ペー・ウーであることが既に露西亞に相應しい。第二次五年計畫ではヴオルガ河と莫斯科河との間に運河を建設することになり、目下銳意强制勞働者を使用し、劍附鐵砲の下に作業を進めて居る。勿論主務官廳はゲー・ペー・ウーの改名された內務省である。昨年六月莫斯科の地下鐵が開通した。延長十二キロ而もロンドン式の非常に深い地下鐵である。僅か一年半許りで之を完成した。恐らく世界記錄の一であらう。每休日には莫斯科の勤務員は社會奉仕の名の下に土工に服した。採算を考へたらこんな馬鹿げたものは出來ぬ筈である云々。

貧困問題を取上げて經濟的自由への途を發見せんと志した社會主義共産主義が、斯の如きものとしては其の儘君臨出來ず、忽ちに歷史的存在である民族全體の內的統制力及び國際社會の對立無政府狀態の爲に、異常なる變容を受くることは何人も之を容認せねばなるまい。此に共産主義の民族化が現はれた。軍擴、重工業、大土木事業の展開する故なし

としない。

先般ヂャパン・アドヴアータイザーに途方もなく大きい足の寫眞が載せてあつた。夫は今度羅馬に建てられるムツソリニの二百何十呎かある石像の脚部で、此の石像は世界に於ける同樣のものの最大なるものなのであるとの事であつた併し之は伊太利に於て行はれつつある大建設工業のほんの一端に過ぎない。伊太利の友人カシニー君から寄せられたファシスト治下の土木事業と云ふ本を披見すると、ムツソリニ治下の伊太利は十年間に二百四十七億リラを費消して居るのに其の以前の自由民主主義政府は六十年間に二百十五億リラを使つて居るに過ぎない。右二百四十七億を以て、國道八千五百キロを舖裝し、軍用道路、國道、縣道、里道を開き、鐵道約四千キロを拓き、八十二の海港を擴大し、利便を增し、河川、運河を改修して舟運の便を增し堤防を築造し、二百三十九萬ヘクターの耕地を拓き、沼澤を干し、水力電氣を三倍に增し、都會に於ては目貫の地十八箇處を改造し、二百の公共建物を築造し、敎室一萬一千アパート五萬を增し、水道下水を完備した。

國粹勞働黨の獨逸は分裂せる獨逸をまとめ、ヴエルサイユ條約を引裂いて國權を恢復し、獨逸の復興加之大獨逸への進路を指示した點に其の功績を認められる。けれども就學義務兵役義務の延長として勞働奉仕の手段に依り地表の奥に新領土を開拓せんと志し、土地改良（不毛沼澤地の改良、堤防構築及排水に依る海面埋立、滿潮時溢水防止施設に依る河川路の改修、貯水池、養魚地、排水分合に依る土地改良）植林（不毛沼澤地の植林、暴風雨、蟲害、山火事で破壞せられたる森林地に施す植林、野獸柵　新設）農民移植事業、都市郊外に於ける小住宅建築、道路特に自動車道路事業、飛行場、集會廣場の設置、防火貯水池、空襲防衞溝の設置等に鋭意して居るのである。

此の大土木事業を起す點に於て、米國が他の全體國家の人後に落ちて居ないことは特筆に値する。米國の政治形態は直接民主國に近く、ウイルソンの時代にも露呈された樣に大統領は獨裁官に近く、其の地位は全體國家の總統と著しく變りはない。この米大統領がニューデイールの一端として、失業救濟の爲め建築、土木、農村振興等に何百億弗の經費を支出したことは人の知る所の如くであるが、近着の華盛頓特電に依れば大統領は、又襲來の虞ある不景氣失業增加に備へて、六ケ年計畫、五十億一千一百萬弗の土木事業計畫、特に灌漑事業計畫を採用し、之を以て一層廣汎にして且つ永續的なる復興事業の基礎となさんことを國會に提議したと傳へられてゐる。五十億弗と云へば約二百億圓だ。一寸法師達から成る國の者共が氣死しなければ幸である。

支那すらもライヒマンの傭聘、全國經濟會議の設置以來相當の建設事業をやつて居る。今漸くスタートを切らんとしてもがく我國を尻目に見ながら。

勞働奉仕は徵兵制度を禁止せられた勃爾牙利が初めて試みた事で、獨逸に廣く採用され、露國では勞働の義務を規定して居る。國家は是非共 Arbeitscharfung をやつて勞働の需要を供給と平衡する迄增し、產業豫備軍を無にしなくてはならなくなり、財政困難は伴うに相違ないが、孰れの國も行詰れる迄國力增强の競爭を敢てせんとし、蘇聯は完全全體國家であるだけ一段有利な地位に在る。民族國家はどう見ても自然的終局的實在體であるらしく、其の相互間の無政府潛在戰爭狀態を除去する方策は、本來ないのが實相であるらしい。此の重壓下に誠に遲蒔に企畫廳は生れた。自由主義を矯正する根本原則、例へば公益優位の原則を確立せずに統制經濟や計畫經濟が如何程迄效果的に行はれるかは疑問である。余輩は此の眞正の深刻の影響を約束する世界の大變革を前にして我國の合言葉として、奢侈的消費の朝宗、雄邦

日本國民全體戰線の結成位を提唱したいのである。一部人士の片腕位を動員して成れる所謂自由民主主義國家は、萬人の全心全力を動員して、之れを合理化され整理された全民族目的に注入する全體國家の前に、果して消し飛ばされずに濟むものであらうか。

第六章　『露國より歸りて』を讀む

有名なアンドレ・ジイドの『露國より歸りて』(André Gide, Retour de l'U. R. S. S. 日本譯ジイド、ソヴイエト旅行記)を一讀して見る。

我々は先づ原著者が共產主義、其の他猶太思想の共鳴者で、蘇聯には苦言を呈する場合にも、同情ある立場から是正を望んで立言して居ると云ふことを記憶せねばならぬ。さすがに彼の社會觀察は鋭く且つ要領を得るに早いが、果して露國の小市民は彼が云ふ如く、店の前に列をなして立つことを樂しみにやつて居るのであらうか、筆者は疑ふばかりでなく夫が寧ろ露西亞人のニエウオー主義から來て居ると考へるものである。原著者は正當に露國に完全な非人格化(コンプレート・ドゥペルソナリザシヨン)あり、人と人、部屋と部屋、コルホーズとコルホーズとは何等不便なしに取換へられて彼等一切は代替物となり、一切の人の幸福は、各人を非個人化することに依つて達せられつつあると云ふことに對して抗議して居るが、文化とはさう云ふものだらうか、それが幸福と云ふものだらうかと、筆者も亦疑はずには居られない。

露國の私人に活字も印刷機もなく、一切の復寫機が政府の獨占に歸して居ることは餘りにも有名な話である。其處で蘇聯人はブラウダに依つてのみ知り、思ひ、信することを敎へられ、子供の時から或る趣向に精神を鍛けられ、一人の露人と話すことは萬人と話すに等しいと云ふことは、經濟的自由の發足點になつて居るよい意味の政治的自由さへ滅却するものでなくて何であらう。原著者は貴族の存在を容認しまい心構へであるが、筆者思ふに一切人は劃一主義(ユニフォーミズム)「規準(ダーニュ)に適ふ」を要求せられて、全然國家生活に沒頭させられては居るが、其の反面に於て家族主義も容認され、追々には筆者の所謂共產を押領した貴族と云ふものが發達して行くに相違ない。原著者は蘇聯が階級を持たないとは誇稱して居るが、餘りにも澤山に貧民が居り、之等の劣敗者(インフェリユール)に對して優勝者(コンプレフラス・ドゥシュペリオリテ)の優越意識が充分に働いて、侮蔑の情が動いて居ることを認めて居る。

一日露國の外交官は筆者に對し生活の一般水準が上つたら、夫で共產主義は及第したとか判定して貰いたいと主張したが、ジイドは或る部分の人の幸福を認めたきりで、此の水準の上昇を認めて居らないのは、露西亞人に氣の毒だと云はねばならぬ。蘇聯の爲政者は革命の延長を要望するトロツキイ派を反革命と云ひ、自分等が天下を取つた其の現狀で、露國の政界を化石にしようとするらしく、原著者は「私は惟ふ、今日如何なる國に於ても、縱令ヒツトラーの獨逸に於てすら人間の精神が此の樣に迄不自由で、此の樣にまで壓迫され、恐怖に脅えて奴隷扱にされて居る國があるのだらうか」と嘆息して居る。筆者想ふに此の事は、合同本部事件や、併行本部事件や、トハチエフスキー事件の裁判でよく證明されて居る。此の頗る面白い小著を讀んだ後に原著者に反對して筆者は斯思ふ。ジイドが何と云はうとも此の本は結局蘇聯反對の木になつてゐる。而て蘇聯に又革命が來るに違ひないと云ふことを。蓋しマルクスの所謂科學的社會革命主義は當然錆付き停止されても、宇宙の法則は停止されず、クレムリンの差當り動きない主人公スターリン等さ

へ、實は其の法則の玩弄物たる原子に過ぎないから。

第七章　奢侈的消費の朝宗　中道全體國家主義の提唱

深遠な抽象論よりも卑近な實例の方が、遙に政治經濟の實踐的原理を了解せしめるに役立つものである。筆者は此の際自家の政治經濟理論を發展さす爲に、例を勸銀本店と日比谷公會堂に取つて見ようと思ふ。筆者の如き素人の目にも高莊な勸銀本店の建築は、銀行に特殊なる金庫等の費用を除くも、其の御影石の上に加へられた數十萬兩の鑿の跡と共に、建築費は恐らく坪當り千圓を超ゆるであらう。之に比すると規模は相當であつても日比谷公會堂の建築は、誠に風情を缺くものあり、恐らく建築費は坪當り五百圓以下であらう。然るときは兩者の坪當建築費の相違は五百圓である が、今假りに此の五百圓を建築に於ける奢侈的消費と見て、其の消費が私立特殊銀行たる勸銀本店に加へらるべきや、市の公會堂に加へらるべきやと問ふならば、恐らく血管硬化の自由主義者はいざ知らず、其の回答は餘り區々に恒らないであらうと自分は信ずる。

特殊銀行として株式會社ではあるが、債券發行の特權を賦與せられ、農業其の他に對する土地不動産を抵當とする長期貸付から得たこの利潤にして勸銀自身の建築美に費された奢侈的消費は、其の消費の過程に於て建築家や多數石工、土工等の爲に勞働設定（アルバイツシャフツ）をやつて居るであらうが、何故其の消費が玆になされねばならなかつたか。公共建物たる市の公會堂、さもなければ國家の必要な營造物、國防施設、然らざれば廣義國防の爲中小商工業者又は農漁山村の復興に使用せらるべきであつたかと問うならば、余輩は躊躇なく後者こそ先順位を持つべきであると主張する。

世には酒池はどうか知らぬが肉林に倦きて、人間たる女中に侍かれて居る愛玩犬もある。之に反して死に瀕した缺食兒童中には、辨當箱丈けを持つて來て、食事の時間人並に喰ふ眞似をする貧兒も居れば、ボロを纏ひ此の世の人とも思はれぬ貌をして、ゴミ箱から肴の骨を引摺り出してしやぶる不幸者も現在ある。之は自由主義を產んだヴイクトリア朝の英國には知られないことであらうが、國家一般は特に我國としては、斯くの如き事實に目を蔽ふことが許されるかどうか、頗る疑問と云はねばならぬ。

近頃自分は新聞に何々家愛猫之墓とか、愛犬之墓とか刻した墓石の寫眞が澤山載せてあるのを見たことがある。某名優が自分の棺を納むべき墳墓を營んで、之れに數萬圓を投じたとの記事を見たことがある。個人主義自由主義から云へばこれは問題にならぬ、當然過ぎる程當然のことである。猫犬既に然り大戰中に成金がフロックコートを着て料亭の風呂に飛込んだといふがこれも不思議はない。而て我が政治家は何等國民自肅の策を圖らさなかつた。皇國の民族連帶が虛でないならば反作用は約束されたのである。

自分は瑞西壽府に滯在中、敵の背面橫斷三百里奇蹟的に生還した有名な建川美次中將當時中佐の話を聞く機會を持つた。中佐は日淸、日露兩戰役で國家の巨額の軍費の消費があり、戰後の躍進で眞に十指を屈する程の富豪が出來、中には不正競爭に依つて致富した者もある。然るに一般庶民特に兵隊を出した大衆の方は、日本の進步向上に連れて其の生活の水準が殆んど上つて居らない。之は將來に向つて考へ直さなければならぬ問題だと云ふことを話して居た。筆者は勿論それが既にマルクス以前の社會改良家、社會主義者等に依り取上げられた貧困問題、經濟的自由への道の問題に觸

れて居ることを感得し、尚民族國家各員の連帶と云ふことを前提としなければ成立たない國軍として此の問題に必ずや當面することを知つてゐた。如上の問題は昭和六年以降の我が國の內政に決して無關係ではない。世界大戰前後を通じて西洋思想の無政府的輸入につれ、社會主義が青年學徒を引附け、一人の穩健な日本主義に立つた指導者も少い儘に、北一輝西田稅の如き少許の adaptation を經た社會改造原理が各方面から渴仰された。併も當局からは文部省に國民精神文化研究所が設けられる頃迄、何等對策が講ぜられなかつた樣である。斯る消極的不感症を前にして國家に龜裂を生ずる決して怪むを須ひない。

個人主義四海同胞主義を徹底するならば、今提起された問題から逃避出來る、併し世界の實狀に於て世界聯邦は成らず民族國家は最終實在體である際左樣な個人主義自由主義の社會は卽ち他の移民族に征服せられて、自由なき奴隸的存在となるに決つてゐる。反對に階級の問題としてマルクスは其處に解決を見出さんとしたのであるが、英人勞働者は第一義に於て大英帝國の一員としてあの程度の生活水準を維持し、支那、印度の苦力等と何等共通利害を感じない。共產革命を經た露國は國家資本主義と云ふ完全全部國家となり、獨伊か社會民主主義サンヂカリズムの洗禮を充分受けた後不完全全體國家に歸着し、傳統的なる歷史的背景を持つ民族協團體の存在を明徵にした。吾人は西洋に於てすらも、迂餘曲折の後國家社會主義が、國際生存競爭の激甚さに比例した程度に於て必至なることを知つて居た。蓋しマルクスの捉へた問題は、普遍な問題で逃避を許さず之を擔任する者は、畢竟民族國家以外に無いからであつて、其處に西洋では國家社會主義に到達する必然性があるからである。國民皆貧論とか財政奉還論とか突飛な言葉を聞くのも、皆な同一問題の不完全な認識から來て居るのである。

軍縮の前提として考究された集團保障と云ふことは、徹底せしむる世界聯邦の結成は不可能で、一應民族國家が永久の實在體で、斯る協同體卽ち民族國家が相剋して其の內部に於て血稅を要求させ、國防經濟の組織を要求して居ることは、一層經濟解放の問題を焦眉の急として訴へしめる。況や長期持久戰の支那事變に當面するに於て特に然りである。

社會主義の妥當するものは夙に家族國家の民族連帶の內に全部包含されて居り、吾人は仁德帝の御精神を發揚し、公益は私益に先きんずと云ふ代はりに、民族國家の生命生活は個別的の生命生活に優位すると提唱したいのである。此の際前述の勤業銀行の贅澤や、愛玩犬の贅澤などが容認される筈はないのである。

全體主義の發揚の爲めに個人主義自由主義は抑壓されねばならないが、生產手段の共有で個人の創意發榮努力を抹殺し、其の結果行き詰つて "socialist competition" と云ふ樣なことを云ふのは不可である。吾人は生產の中に個人の創意發案を充分に取入れ、其の發揚された個人の價值を其の儘直に之を全體たる國家に回向さすべきであると考へる。其の手段は消費の方面に於て奢侈的消費に向けられる經費の朝宗奉還を實踐せしむることである。國家が血の犧牲を呼ぶ軍國では是非之が必要である。國家は止むを得ざれば奢侈的支出の全部は勿論、必要經費の一部すらも之を奉還させて差支ないのである。

此の際考へねばならぬことは、惰眠する消極的官職保持者などは國家に毫末も必要なく、無用な省や局は廢止するを可とし、旁々出來れば朝宗するものは、奢侈的消費の一部に止めるを可とする。併し全體の必要は何時でも全部を國家に朝宗せしむるの原則を確立することが必要である。さすれば其の結果は直ちに平時から生產に影響し、國防國家の常

續的强化に役立つに相違ない。

今や電力統制案は議會に上程されんとして居る。此の機會に該案の犧牲となる關係上反對する資本家に對し非難の聲も高い樣であるが、今迄非常時に入りてより一寸法師的に增稅の事行はれしも、一度も奢侈的消費の抑宗の指導原理は高調されず、個人主義の上に負擔の公平位を叫ぶのであるから、之では電力案に一部資本家が反對する理由がある。一度奢侈的消費抑宗の原理さに徹底すれば、統制は何事に依らず頗る容易となる。蓋し其處には生産に於ける不平等、精神的序列の不平等に對する補償として消費に於ける平等があるからである。同時に生産に於ける創意貢献に對しては、國家的表彰を行ふを可とし、位勳等我が國體に鑑みても、官吏の獨占物であるべきではあるまい。

余の提唱する日本中道全體國家主義は、長く人類を惱ました問題から人類を解放せしむるに當り、奢侈的消費の抑宗を要求して止まざるものの如くである。（昭和十二年十二月）

第六編　雜　錄

一、文化外交の昂揚

一切の重要問題は同時に政治、經濟、文化的であり得ることを我は先づ承知して置かねばならぬ。偖て政治外交特に日支外交關係に於て、近時擡頭したものは所謂佐藤外交である。日本が進んで始めない戰爭はないと云ふに似通つた命題は軍擴肯定とは一致しない點もある樣だが、日本の聊か過少軍備に陷入つて居る點を强氣を出すことに依つてカモフラーヂするとか、又は我方準備の優越を誇示する意味に於ては上乘なるものである。一切のものに表裏明暗があつて、藥になるものは大抵毒物である。夫れは兎に角、日支關係が又新に「スタートー」を切り直し、建設的首途に上ることは之を歡迎せねばならぬ。倫敦「タイムス」は佐藤外相の聲明を以て、東亞に於ける最高地位に對する要求の拋棄への轉機となり、英米の對日友好關係への素因となるものとなし、唯だ內政上陸海軍が大豫算を得ると同時に、統制經濟が强化されてゐたことを遺憾として居るのであるが、既成事實及び現狀とを如何にして新容諾と調和さすかの問題は暫く措き、新空氣の醸醸は一意之を利用すべきである。

經濟外交に關し我が經濟使節は、今や日支經濟提携に乘出し、議會に於ては對支投資團として香港上海「バンキング・コルポレーション」の如きものの組織が問題となり、各在支日本人商業會議所は上海に於ける聯合會に於て小資本投資事業の奬勵、支那不動產に對する貸付の開始、對支輸出保障條例の檢討、日本向輸出品に對する支那輸出稅の再檢討、日支經濟提携實現の手段、支那鐵道の日貨差別待遇に對抗する手段等の諸問題を審議し、茲に日支經濟關係にも新たなる視野が開かれることとなつた。時に對支經濟視察團は支那朝野と國民外交を行ひ、蔣院長より論語の教訓を聞き、故澁澤子爵の靈に對する獻華を捧ぐるに遭ひ、日支親善關係の開花に對する敬虔な態度を表明して之に答ふる所があつたと傳へられて居る。政治問題の調整が經濟提携の先決問題だとの中國人の批評には一理あるかも知れないが、兎に角何等かの具體的效果を齎らして歸來して

ほしいのである。

一切の軍事問題は同時に政治、經濟、文化的であり、長い眼で見るときは教育や、技術は最高の政治であるとも云ひ得る。故に吾人は國際聯盟の對支援助に當り我方代表が其の政治的性質を帶ぶべからざること、日本の支那に關して有する知識經驗を利用すべきことを保留したゞけで、漠然爾後の監視を怠つたことは手落ちであつたと考へるものである。去り乍ら此の事實は文化と云ふ問題は比較的に截然と政治經濟と切放し得ると考へられ易く、さてこそ右の手落も起つだ次第であることを物語つて居る。從つて今時經濟提携を云ふべくんば一層文化提携を云ひ得べく、恐らく佐藤、王日支外交指導者の登場は文化外交に拍車を掛ける絶好の機會であらねばならぬ既に三月五日の北平晨報は王・佐藤兩氏の外相就任を歡迎し、日支兩國關係改善の上に希望を繋ぎ、一月二十六日、日本の四省幹部會議に於て「對支傳統政策を變更し、支那の對日惡感を解消せしめ、日支外交上政治問題は將來に保留し、目下は全力を經濟及文化の提携に置く」と決議したる旨の報道を掲げて之を賞讃し、中國人の平和憧憬、生存慾、日本人の榮譽心讃讃の美德を高調し、兩國外務當局にして克く時期を誤らず平等互惠、領土主權、相互尊重の原則を恪守し、眞の合作を爲すに於ては東亞兩大民族を永久平和の途に導入ろること困難ではあるまいと論じて居るではないか。政治關係經濟關係を矯的に整調することが若し困難なりとすれば、文化關係の調整を以て前二者の調整を基礎附けることも考へ得られるのである

筆者は聊かながら對支文化事業一般と一般對外文化事業一般とを併せ承知して居る心算であるが、前者は日支否な日滿支文化關係の特殊性に基礎を置き、後者は我國文化の世界文化に於て占むる現在の特殊の地位及び其の將來性に基礎を置いて居るのである。併し事實上先づ對支文化事業があり、次に一般文化事業が誘導されて來たと云ふ歷史上の先後の別は依然尊重せられねばならぬ。從つて若し一般文化事業が獨り精彩ある發展を遂げ、對支文化事業が閑却されて凋落し、前者が後者の榮養素を搾取すると云ふが如き事態に立ち到ることは頗る望ましくないことと云はねばならぬ。

偖て一般對外文化事業が發展して今や交換教授と云ふ樣な事が頻繁となり、現に獨、伊、墺、匈、濠洲、比律賓等の權威ある學者と我國の學者との間に文化的交驩が行はれて居ることは慶賀に堪へないことであるが、其の反面に於て支那留學生が追々激減する傾向を示して居ることは遺憾である。支那には最早親日派なる名辭なく、知日派あるのみであるが、此の知日派も最近迅速に其の勢威を失墜し、所謂歐米派に依つて代はられつゝあることと相俟つて、滿洲事變後一時激減し、其後我方東亞安定力政策の昂揚に伴うて激增して、七千名に上つた支那留學生數は頗年千名宛の減少を記錄して、今や五千名以下に降らんとして居るのである。之は我國對支文化事業の「バロメーター」の下降とも云ふべく、吾人は是非とも此の趨勢を挽囘せねばならぬ。尙互惠平等の見地から此の際叫ばれねばならぬ一事がある。此の頃の支那人は云ふ、自分達が日本の實相を各種の視野から徹底的に研究して居るのに、日本人の支那認識は頗る幼稚であるので、所謂對支新認識の如きも未だ未だ不徹底で、皮相極まるものである許りでなく、夫すら普遍化するに至らないと。或は然らん、而して之が是正を爲す爲めには我國からも凡そ同數位の學生を支那の諸學校に入れて支那人中に同窓生としての知己を持たしめる樣に仕向けることが日支親善に百尺竿頭一步を進むべく必要であるのである。

今日支那には多數の日本學校があり、小學校、中學校、高等女學校、東亞同文書院に及んで居る。此の同文書院は我國の對支關係上に偉大な貢獻を爲し來つたものであつて、今日世の需要に適合せることは卒學生が在學中に全部實切れになつて居ると云ふ事實にも之を徵し得るのであるが、之は支那學制の實情にも鑑み、東亞同文大學に改めて貰ひ度いものである。斯樣にして上下に一貫し、夫々完備された一揃の學校を持つて居る以上、是非之らも支那人の爲に或る程度迄開放し利用さすの途を開くことが望ましいと考へられる。

先刻知日派の凋落に言及したが、我國は必要止むことを得ざる場合を除く外は、我國の對支政策を之等知日派の羈足を伸ばし得るに資し得る樣に持つて行くことが望ましい。佐藤外相の演說が支那及歐米に於て受けが宜敷かつたことも、此の方面で勘くも一部の妥當性を含んで居るに職由するのではあるまいか。汪兆銘や唐有壬等が或は失脚し或は襲擊さるる樣に迄持つて行つては、勿論先刻の留保を留保しての上のことではあるが、最早外交則ち平時戰略論は之を用ゐる餘地がないと云はねばならぬ。

對支文化事業には日華學會、東亞同文會、同仁會、在支居留民團と云ふが如き隱れたる功勞者が多數ある。最近東亞同文會々長に近衞公、同理事長に岡部子爵が就任せられ、同仁會には林男爵が迎へられることとなつたのは慶賀に堪へない。勿論時世の進展と鼓動を伴にし時世の必要を見拔く賢者を擧ぐる必要はあるが、凡そ文化事業の補助團體關係者は其の社會的地位、學問的權威、經驗、手腕等の價値を捧げて該事業の第一線に立働いて居るのであるから、明に信賴を裏切る樣なことのない限り、所謂官僚の獨善主義——果して存在するかどうか知らぬが——を以て萬一にも、右の價値を Over-rule するが如きことのなき樣囑望に堪へない。

北京の人文科學研究所は北支工作實察政權の特殊地位等に鑑み、大に文化外交の第一線に立つて今頃は活動すべき秋であるが、成るべく實際に繼遠いことをやると云ふ樣な主義方針に制せられてか意

義ある活動を示さないのは殘念である。上海の自然科學研究所は同樣な主義方針の制縛はあらうが、國際聯盟其の他の專門家の支那再建に對する技術的援助の廣汎にして特筆すべき成績を擧げつつあるに鑑み、寂寥の感なきを得ない。最近の經驗は東亞安定力政策が全く經濟外交文化外交の支持なくしては圓滿に遂行され得ないことを物語つて居り、所謂北支工作の如きも其の範圍と限界とを經濟交通兩外交の需要と可能性とに即應せしむる必要がある。さもなければ我々は政治外交、實力外交の行過ぎから反動の來る事を覺悟しなければならぬ。長い生命を持つ最高の政治は既に述べた如く教育と技術とである。歐洲人の一塊に植民地又は半植民地と考へた亞細亞から雄邦日本が擡頭したのは專ら教育を背景とする技術のお蔭に依るのである。「技術代表の任命は純然たる技術的且つ非政治的のもの」で支那全國經濟委員會――其の常務委員會は南京政府の最高首腦部を網羅す――との技術連絡員として行動すべし云々と云ふが如き文句を額面通りに受取る人達の氣が知れぬ。「ライヒマン」博士の使命は波蘭系獨太人たる彼の陰謀を出發點とすることは云はずもがなな其の手を染めた事業は道路、治水、保健、棉業、蠶絲業、紡績業、關稅政策、通貨政策、江西建設、西北建設、土地政策、燃料問題研究の爲の地質調査所、經濟調査、茶實驗所等に及んで居る。多分聯盟の派遣員を含めて南京政府には百餘名の顧問がある。我々は彼等の活動に就て今迄何等の報告に接しないが、西安事變に當り蔣氏救出に專ら奔走した者は一濠洲人ドーナルド氏であつたと云ふことは注意に値する。斯の如き顧問の影響と華盛頓會議の諸條約諸決議の影響と孰れが大なるかは一の研究問題である。斯の如き狀態の下に百の天羽聲明を發するも遺憾ながら風を微動さすに止まるであらう。されば我が文化外交の第一線に在る諸機關は、唯指を咬へて歐米派たる支那人と外人顧問との合作を見て居らずに、能動的に愚を覺り、救濟を試むべきではあるまいか。

我が內地に設置せられてゐる東京及京都の東方文化學院も行々は一方に於て支那の現在及將來竝の把握に役立つ樣な問題をも取上げ他方に於て壹中天地を守らずに、國際面特に對支面に於て、何等か貢獻される樣希望に堪へない。

最後に交換講演、學者等の來往、展覽會の開催等、之を復活せしむる必要があること云ふ迄もない。

對支文化事業特別會計は其の五千餘萬圓の基金を公債又は郵便貯金の形式に於て保有し、約六分の利廻を得て年三百萬圓の事業を行ふ計畫になつて居るが、此の案が著しく有限な經濟知識の上に立つて居ることは始めから明瞭な事實であつたが、政府の低金利政策で此の弱點は遺憾なく曝露されるに至つた。一方多少の危險性を伴ふとも、對支文化事業の縮少を避くる爲めには一層自由な資金利用策を採用することが是非共必要であると考へられる。

兎に角對支經濟視察團は支那朝野の大歡迎を受け、尠くも精神的諒解の基礎たるべき諸考慮位は把握して歸つて來るものと期待せられるに至つたことは、對支新認識の上に立つ我が外交の一成功と云はねばならぬ。吾人は若し佐藤外交が百尺竿頭更に一步を進め、對支新認識に於て衆に先んじた朝野の信望厚き權威ある政治家學者等を團長とし、本稿中に於て言及した各種の對支文化事業團體中の權威者を委員として文化使節團を派遣するならば、彼の濟南事變以來引續き全部的に合作協力の阻碍され居る對支文化事業を、全面的に復活せしめて、日支精神的提携の基礎を置き得るではあるまいかと考へる。支那側の好まざる如き所謂北支工作は、日支關係の全面的好轉に依る圓滿なる提携合作に依り、代はられることが頗る望ましい。其の以前に於ても斯る工作は、其の必要に即して、其の範圍と內容とに於て有限なるべきを可とするは云ふ迄もない。日支關係が此の境涯に至る道程に於て、文化外交は經濟外交以上に昂揚されねばならぬ。是れ吾人が大文化使節團の派遣を提唱して已まない所以である。

（昭和十二年三月二十日稿）

二、拙著『國際軍備縮少問題』の批評に就て

拙著『國際軍備縮少問題』が上梓せられてから約八箇月、此の間に於て德富蘇峰先生が東京日日紙上、敢て當らざる溢美を以て小著を江湖に紹介せられ、米田博士が朝日新聞紙上、横田教授が東京日日紙上小著の紹介と批評とに當られ、紙面の關係上簡單ではあるが多くの示唆を與へられたるは、余の感謝措く能はざる所である。尙外交時報及國際評論編輯部が、小著の內容を懇切丁寧に紹介せられたる好意に對しては、是れ亦感銘措く能はざる所である。恐らく一篇の小論文にして世上此の程度の反響を見たことは、既に榮譽とするに足り且つ著者の向學心を鼓舞せずには止まない。今之等の批評を概觀して尙聊か素懷を述ぶることとし、以て評者の好意に答ふると同時に、將來の大成を期するの標識としたいと思ふのである。

ニーマイエル教授の軍縮論は上下二卷より成り、上卷は資料を含み、下卷は理論的研究で六、七の名家の論文を集めたものである。從つて拙著の史論と原論とに該當する二部より成立つて居るのである。けれどもニーマイエルの著は上卷と下卷とは何等論理的の關係がなく、下卷は一全の問題の把握ではなくて、單なる論文集である

余の史論は國際評論編輯子の言ふ所の如き「エンサイクロペヂア」には稍や足らないかも知れないが、徒らに長き記述よりは寧ろ本問題の史的鳥瞰圖を提供せんと欲したものである。而して其の記述は原論に於て發展すべき事實に關する余の解釋を獨斷に避けつつ提示して置いた。從つて余の史論なしに余の原論は存在せず、二者は實に不可分の關係に置かれて在るのであつて、此の點は夙か余の自負する所である。

斯くの如き見地よりすれば、史論重きか原論重きか、前者に價値ありや後者に價値ありやは餘り意義ある問題ではない。横田教授は史論を以て內容も豐富に敍述も公正に、本書の內最も價値ある部分とせられ、米田博士も亦全く同一の見解を披瀝されて居つて、此の點は余の頗る意を强うする所であるが、併し余の努力の結果として創造を以て聊かたりとも誇るべきものありとせば、夫は原論の部であつて、余の先輩同僚の感想も亦之に一致して居る。

第二義的の問題ではあるが、聯盟の軍縮運動の部分に於て不戰條約に就て記述したことは首肯し得ない人もあらうと思ふ。併し一面史論の結構から云つて、不戰條約に一章を設くるのは余の見解に從へば著しく不當である。他面米國の聯盟脫退、相互援助條約、壽府議定書との關係に於てのみ、此條約の意義は完全に把握せられるのである。是れ形式上不合理なるも、實質上合理的なる配列に從つた所以である。

軍縮問題に關し人の取り得る二種の對立せる立場は平和主義者と實際主義者との夫である。此の點は余輩が序論に於ても原論に於ても努めて的確に記述を試みた點である。横田教授は「凡そ現在に於て最も要望され乍ら實際に於て容易に實現されない問題は軍備縮少の問題であらう。軍備なかりせば負擔の輕減、社會的福祉の向上、世界平和の增進が如何に容易に實現せられたであらうことか。唯其の實現を阻碍する種々の原因や勢力のある爲に一部的海軍軍縮を實現し得たるに過ぎない。けれども軍縮は兎に角二十世紀の世界の要望なるが故に今少し親切な、實證的な、組織的な敍述があつて然るべきである。即ち何故に軍備縮少が必要であるかの理由に就て彼事が少しく不充分に感じられる」と言はれて居る。

以上の數言は明瞭に横田教授が所謂平和論者の立場を取られて居ることを證明して居る。軍縮は兎に角二十世紀の世界の要望なりと云ふ綜合判斷を何等の躊躇なしに下し又は受容れる爲めには、斯標な半面の眞理を全部の眞理なりとして把握せしむる慾求主觀が存在するからである。此の慾求こそ即ち平和論者たるの標徵であつて、斯かる先入主を排擊せんと欲する余輩には先づ第一に二十世紀の世界とは何ぞやと云ふ疑問が起る。二十世紀の世界と十九世紀の世界とは爾く別物なりやと反問したくなる。吾人は歷史と云ふ紐緣の內

に生きてゐる、吾人の內には死人が生きて居るのではないかと反問したくなる。世界は地球でなくて人類の意であると思はれるが、夫は十八億の個我の總體なりや、文化的意義の民族我の總體なりや、將た又政治的意義に於ける民族國家の總體の意、即ち國際法上の國際社會なりや、吾人は反問せざるを得ない。右三者は或る程度迄共通の點を持つであらうが、其の相違は既に可なり明白である。然も其の相違の內容に關する片言隻句は見附かるも、的確なる系統的研究は余輩の寡聞なる未だ之を發見しない。どの道吾人は軍縮問題の研究上政治的意義に於ける民族國家を其の主體として取扱ふの外ないが、一體獨逸國は主として軍縮を求むるものなりや、主として軍備平等權を求むるものなりや、容易に斷定を下しうる問題でない。佛國は果して軍縮を希望するが故に安全保障を要求するものなりや、將た又軍縮を好まざるが故に之を阻止せんが爲に安全保障を要求するものなりや、容易に判定を下しうる問題でない。獨逸人エルツニンは「軍縮を意業する社會主義者」と云うてボンクールを罵倒して居るのであるが、彼は果して鹿を指して馬となすものであらうか、輕々に斷じうる問題ではない。普通は斯くの如きものとして超越的の世界に之を求むべきものなりや、余は普通は特殊の內に內在すると觀ずるものであるが、外觀上然る如く絕對無條件に英、米は軍縮を翹望して居るであらうか。英國海軍は平等權問題に於て米國に對し讓歩したとは言へ、歐洲に對してはクラウゼウイツツの所謂絕對的優勢を保持し、三國標準を維持して居る。英國の對米均勢は軍縮への意思の端的の表明であつて、華府會議直前より漸く具體的の形相をとりたる英米聯盟に含まれる英、米不戰の結果でないと斷言できるであらうか。陸軍に於て英國は犧牲に供すべき何物をも持たない。印度に於ける優勢を動搖せしむるが如き意圖は毫も之を觀取することが出來ない。其の反對こそ寧ろ證明出來る。米國こそウイルソン以來軍縮運動の主役者である。此の國の海軍擴張史は二回の躍進をなして居る、第一回は西班牙を懲らさむが爲めであつて、第二回は一九一六年の對獨とも對英とも目的の判然しない海洋自由を看板とする海軍擴張であつた。的確なる自主的目的なき海軍擴張に軍縮要望に關する希望條項が附帶せられたとして何の怪むを須ひようぞ、ベンソン提督は一度び英國との均勢を克ち得んか、其の後は極めて經濟的に世界第一位の海軍を維持出來るであらうとウイルソンに建言して居るのを吾人は如何に解すべきであらうか。米國海軍の存在理由は明瞭に動搖し、滿洲事變以來漸く安定し來つた。事實上建造せざる「紙上の條約上の海軍」なるものが生誕し來つたことを吾人は如何に解すべきであるか。一度存在に持ち來された生物の武器や國家の軍備と云ふものは、不使用の爲めに退化し滅失する傾向は厭然と認め得る。斯様な立場に在る國が軍縮に銳意し、「紙上の

二、擁著『國際軍備縮少問題』の批評に就て

條約海軍」を持つに至ると解するは果して曲事であらうか。外交史を研究して國家が其の爲さずと聲明したことを突如實行し、其の爲さんと約束したことを爲さずに終つた事例を吾人は發見しないであらうか。露國の即時軍備全廢案は誠に軍縮への意思を表明したものである。世人は此の提案が余の解釋を俟つまでもなく歐洲の階級鬪爭、亞細亞の民族革命促進の爲めなることを指摘するのであるが、世界の普遍的要望たる軍縮は何故直ちに具體化しなかつたか。個我が、民族我が望ましい望ましいと說きながら嘗て實行しようとしないことを、果して彼等は望んで居るであらうか。平和問題や軍縮問題が優越權政策の道具に使はれて居ると云ふ樣な言は、果して人間の神性を傷つける惡魔の言として貶すべきであらうか。横田教授も認めた如く軍縮問題の解決された部分が僅少であり、然も余輩の云ふが如く軍備競爭が醫者の用語に所謂內攻を續けてゐる傾向から見れば、世界は軍縮を熱望すると判斷するの妥當なりや、世界は軍縮を希望せずと判斷するの妥當なりやは眞に識認に徹底せる者のみ之を爲すことが出來る。其の際國際法外交史等重要なりとは云へ、人類社會、特に國際社會の寫眞を把握するに充分な資料を提供しない。既に國內及び國際政治の眞相に透徹することが至難なる上に尠くも余輩の軍事學に關する智識等は極めて不十分である。それにしても米田博士の認められた如く、生物學、社會學の如き補助學科をも使用した余輩の用意は、實に玆に存したのである。斯樣な學問に對する態度が、平和主義者の先驗的判斷と一致したら反つて不思議である。

余輩は原論第二章「軍備縮少論の基礎」に於て軍備縮少の必要なりとせられ、望まんとせられる所以を充分に揩說した心算である。而して今日に於ても其處に述べ盡されなかつた他の理由があるとは氣附いて居ない。勿論簡單で意は竭されて居るまいが、横田教授自身が此の點に觸れて述べられて居る點も何等の新しき示唆を含んで居らないのである。併も同教授は何故に軍縮が必要であるかの理由に就いて拙著の敍事が不充分であるとなし、今少しく親切な、實證的な、組織的な敍述があつて然るべきだと要求せられて居る。「勿論前記第二章の記述は第六章第二「相對的安全保障を前提とする軍備縮少協定の可能なる所以」十二點に依りて補足せらるべきであるが遺憾ながら余は更に之に加ふべきものを持合はせない。若し之に「現狀維持主義の國特に飽和國等が、自主的所要量にあらざる軍備の進化論の法則に基く退化を阻止し、又は此の退化前の形勢を有利に外交政治を用ゐんとするときに軍縮は最も眞劍に要望せられるのである」と云ふことを附加するならば、之は非常に重要な點でもあり確實な認識でもあるが、夫は明に横田教授の期待に正反對の論結を强むるものであると思はれる。

二、拙著『國際軍備縮少問題』の批評に就て

之を要するに平和主義者と實際主義者との立場の相違を完全に醫する方法はないと思はれる。平和論者は軍縮を一全の解決濟の技術問題として扱ひ比例論者となるのであるが、余輩は之を平和問題と云ふ玄妙不可思議の、範圍も定かならぬ程茫大な問題の部分問題と見るのであつて、平和主義者の歸着點は吾人の研究の出發點であるのである。夫れにも拘はらず、若しも吾人にして歷史的方法を取つて進むならば其の判斷中には人間の理念の活動の結果も過不足なく織込まれて來て居ろべき筈であつて、實際論者が平和論者と同樣の一面的重視又は輕視に陷るものとは速斷出來ない。米田博士は「だが讀者は本書のみを讀みて軍縮問題を充分に了解すと考へてはならない。蓋し今日迄我國に多く現れた理想的軍縮論者くは之に近き諸著述を讀んだ人々は是非本書を讀まねばならぬと共に、本著に依つて始めて軍縮問題に接する人は是非他の著述を讀破する必要がある何となれば著者は生物界の恒久的鬪爭の樣式が人類社會に於て改善せられる傾向を最も少なく認むるものであり、彼の憐憫心博愛宗教等を無力視するノヴイコウすら唱導するエメリオレーヂーブ・ブリンシブルを輕視するからである」と述べて居られるのは、拙著が理想的方面を輕視したことを非難せられるのであるが、余輩は右樣の要素、即ち人道的平和的國際主義と云ふ要素を有るが儘に正當に評價せんとしたのであつて、之を過小に評價する意思は毛頭なく、何んと云つても軍縮問題の出發點は宗教的倫理的慾求たる人道的平和的國際主義に在ることを結論の最後の一句中にさへ明示して置いた次第である。さは云へ米田博士の意中に置かるる例へば尾崎學堂翁の軍備制限論が、右要素を明瞭に法外に過大に評價して居る事を高調力說したのは、今日に於ても尙至當の見解であつた事を確信するものである。

實際論者の立場として余輩は所謂ダーウイン主義的社會觀に論及したが、余はダーウイン主義的社會觀を採る論者と之に反對する論者との說を比較檢討し、双方の誤謬を指摘した上兩說の上に止揚せんと試み、其の成功して居るかどうかは知らないが、此の機微の見解を次の數句を以て言ひ現はした心算である。

生物界を支配する存在の法則を、全然其の儘或る程度に於て悟性思惟の協同する世界、能知と所知とを混同する世界に移して、當爲の法則となし、生存競爭の一形式に過ぎざる戰爭を必要、至善神命、目的論宇宙觀の顯現なりと牽强附會し、其の戰はるべくして戰はれざりし戰爭を認めうるや否やは疑問とするも、國家組織の內部に於ては全般的に、國際組織に於ては仲裁裁判制度の如く部分的に、動物的爭鬪が智力的爭鬪となり、生存競爭の手段及形式に幾分の推移あるを認識せざらんとするは儻に社會的ダーウイン主義者一名武人的生物學者の誤謬なり。……智力的競爭も

決して エデンの樂園に於ける美的體育競技會を意味せずして、其處に支配する敵愾心は物理的戰爭の場合と同樣に深酷に、智力的競爭も尙潛在的戰爭、休戰狀態に過ぎざることあり、其の發して暗殺、直接行動、革命、內亂、獨立運動等となり、物理的戰爭に逆轉するの事實を忘却したるは社會的ダーウイン主義排擊論者の誤謬なり。

されば表現に於いて缺くる所ありしやも知れないが、余は決して橫田敎授の指摘せられる如く戰爭の必然性を力說しては居らない。自分の氣持を繰り返せば、戰爭と平和とは夫々陰陽の如きものであつて、太極に於て一致し、平和も戰爭の因を含み、戰爭も平和の因を含むと曰はば一厘余輩の認識に近くなると思ふ。

次に橫田敎授は著者たる小生の立場を基礎づける爲めには現在の資本主義的經濟機構の解剖こそ最も必要であつたらうと考へられると言うて居られる。此の言は簡にして眞意を把握するに苦しむのであるが、恐らくホブソンが「近代資本主義の進化」の內に於て述べて居る次の言は、橫田敎授の御考を敷衍したものと見て當らずと雖も遠からずではあるまいか。

一切の近代帝國主義的膨脹の主たる指導的動機は市場に對する帝國主義的產業の壓迫である。初めは投資に對する市場であり、次は內國產業の餘剩生產品に對する市場である。資本の集中が極點に達したる處、極端なる保護主義の行はれる處に於て此の壓迫は必然に最も强烈である。……而も之は唯だ政治的支配の範圍を擴大することに依つてのみ目的を達することが出來得る。之が近時米西戰爭、フイリツピンの併合、對パナマ政策、南米に對するモンロー主義の新適用等に依つて開明せられたる米國對外政策變換の根本的理由である。……外交上の壓迫、武力、又望ましい處を政治的に支配する爲めの領土の獲得、總て之等は米國政界の運命を左右する財界の巨頭に依つて操縱される。目下建造に着手したる强大な且つ金の掛る米國の海軍は、偶々造船業及金屬工業に有利なる商賣を提供する目的に役立つてゐる。該海軍の意義と效用とは財界資本家の經濟的必要から國民に强ひられたる侵略的政策を助長するに在る。

以上はマルキシズムのイデオロギーの机上の敷衍である。けれど余輩の學問は斯樣な論理を其の儘受容するを許さない。余はマルキシズムの結局の妥當性は經濟的民本主義に在ると判定して居る。スミスの說明に依れば華府會議は米國の金融的又は資本的國際主義の所產だと云はれる。勿論勞働階級の國際主義も考へうる。資本家階級の國際主義も考へうる、併し兩者は共に實在せず、英米の勞働者と東洋の苦力とは反つて食敵である。資本家の競爭は今ホブソンの述べた如くである。米國が特異の繁榮を保ち、同國の工業が他國に

十倍する賃銀を拂ふならば鎖國を必要とされ、後々は多大の軍備を必要　するに至るかも知れぬが、之は資本家の爲めか勞働者の爲めか、恐らく兩者の爲めではあるまいか、余は幻影を追はずに實相をのみ追ふことに努めた。資本家は云ふ迄もなく、勞働者も民族意識の支配下にある、日本に於て軍國意識が濃厚となるや財閥が最も孤立せる地位に曝されたことを橫田敎授は何と見られるであらう。獨逸の國粹社會黨の擡頭に依り、對外强硬政策、勞働主義、猶太人排斥方針が採用され、ムツソリニがサンヂカリズムの後社會主義者の內より出でたことを、マルキシストは如何に說明せんとするであらうか。兵器製造業者と云ふ個人が兵器を或は國內に或は世界に賣捌かんとする或は國家主義或は四海同胞主義を、他の要因から來る軍國主義なぞと混同してはならない。余は資本主義が市場獲得の爲め民族戰爭、從つて軍備競爭を惹起し、軍縮を困難ならしむと云ふ樣な高等論理の境地よりは、遙に現實界の奧秘に分け入つて居る心算である。

拙著は相互援助條約案、壽府議定書の可決より不戰條約の締結に至る迄世界平和運動の最高潮に達したる時期に於て書かれたものであつて、此の運動の依て來る所と其の底力とには充分の考慮を拂つたのである。而して今國家主義、特に經濟的國家主義が最高潮に達した今日に於て、極東の事態、南米の事態、歐洲の風雲、壽府に於ける一般軍會縮議の現狀等に對し、拙著は最も廣く深く妥當する說明を提供し、愈々其の客觀的妥當性を發揮して居ると思はれるのであつて勿論完全ではあるまいが、橫田敎授の拙著を以て此の問題に關する完結的な著書であるとの批評を遠慮なしに御受けしても敢て不遜には當らない樣に思はれる。最も長き、倦むことを知らざる讀書と生活經驗とを積まれた德富蘇峰先生が、拙著の結論を無留保に裏書せられて居るに於て特に然りとする。又米田博士は拙著を他の日本の著書と比較せられて居り、之等と相補うて十全の認識を把握し得るかに說かれて居り、余も之等の著書は之を尊重し、努めて之を涉獵したのであるが、余輩は未だ日本に於ても世界に於ても、拙著に對立して、其の缺點を補うて之を一層完璧ならしむる如き著書を拜見しないのを遺憾とするものである。

オツタワに於ける英帝國會議の節、加奈陀の保守黨代表は「英帝國一の語を用ひ、社會黨代表は、コンモンウエルスの語を用ひ、チヤムバレンの裁定でコンモンウエルスの用語を會議中使用することとなつたさうである。日本人中にも無意識の內に帝國とか帝國主義とか云ふ文字を回避しようとする人は相當多い。併も彼等自身マルキシズム又は徹底せる民主主義思想の影響の下にあるを覺らないものの如くである。米田博士の指摘せられたる如く余輩が他の論文中に於て「帝國主義は正義なり善なり」と云うたのは其の反對の立言

をなしても無意義であるからさう云うた迄であつて、或は「帝國主義は不正義でもなく不善でもない」位に云つた方が穩當であつたかも知れぬ。然らば余輩と米田博士と何れがヨリ帝國主義者なりやと云ふに夫は同等であると云はねばならぬ。余輩は朝鮮、臺灣は勿論滿洲に於ける最高の利益すら之を抛棄すべしと主張したる事なく、政府の從來の方針を其の儘是認せんと欲するものである。米田博士も同一であらうと想像する。從つて余輩は帝國主義者であるけれども日本人六千萬人の「平均人間」以上に帝國主義者でないことを明瞭に斷つて置かねばならぬ。英國の勞働者も亞米利加の勞働者も亦彼等の屬する帝國主義國の部分たる意味に於て帝國主義者である。之に反對する者に祖國の覆滅を望む外行き方はなく、斯樣な人間は露國や佛國に於ても多數ではない　健全な民族は勿論斯樣な存在を寬容しまい。抽著は何人も了解し得るが如く、決して帝國主義を主張せんとしたのではなく、唯其の存在を客觀的に確認した迄であるが其の基礎は資本主義を除外することなしに、寧ろベルグソンのエラン・ヴイタル等に求むべきものではなからうかと思つて居る。

帝國主義には倫理的帝國主義と未成年軍國的帝國主義とを區別するが適當である。余は㈠帝國が有色人の國家にして、㈡"in the name of"の字句が問題を明るみへ持出した樣に蠻國に冠絶せる國體を有し、㈢未成年軍國的帝國主義國の現狀に在るを以て米國との衝突を日本に有利に滑算せざりしこと」を遺憾として居られるが、これ等の點は余の無條件に共鳴する所である。少くとも九ケ國條約のプレアンブル中に、日本が嘗て「石井ランシング協定」においてその採じやう地域における特權を約束せられて居たといふ歷史上の事實を記錄的にうたつて置くべきであつた事、更に該條的の有效期間を限定すべきであつた事を痛感するものは、けだし余一人ではあるまいと信ずる。是等を欠くが故に該條約は石井ランシング協定の效果を一片の昔語りとなし、引いては滿洲事變勃發不可避性の一構成要素となつたと認められる。

能不可能の範圍を明瞭にせられた、三枝茂智氏は最近また『極東外交論策』なる好著を世に示された。氏の所論は前揭『國際軍備縮小問題』に立博士が序せられた如く、理論を無視せざると同時に實際的見地を離れないものである。氏は本著の序言において

「おもふに現下の非常時はつとに約束せられたる帝國の宿命であつて皇國の特殊性に根を張れる武力が國際平和機構――よしや除外例や留保を求め得たとしても猶足らぬ如き――によりて封ぜられ、帝國が條約文面上の過熟文弱國となり、無政府狀態の下に天下に武を布き、米國流國際主義の潮に乘れる以夷征夷政策の成功に漸く陶醉せる隣邦封建將領の蹂躙を招きたる時、不可避の情勢に置かれたるものである」

と述べて滿洲問題が帝國に及ぼした必至的運命を喝破してゐる。

更に、聯盟規約、九ケ國條約、不戰條約の類を神の啓示の如くに考へ、日本のいはゆる特殊權益をば門戶開放主義にれい屬依存するものの樣に解するに至つた一部人士に對して、猛省を促し（第一編第一章）その一面において、準絕對的帝國主義に墮する恐れある「シヨウヴイニズム的」の日本主義、極東モンロー主義、大亞細亞同盟等の崇拜者流に對して警告することを忘れないで（第二編第七章）日本の國策の建直しを說いて居られるが、この邊は氏の憂國的絕叫の眞骨頂とうかがふべきである。

また氏は第一編第十章「帝國更生外交の原理と術策」なる項下に、九ケ國條約を結ぶ前に日本政府が「門戶開放を行ふなら極東だけでなく世界の門戶開放を實行しやうではないかと提議して米國の上手を行き、カリフオルニヤ、メキシコ、中米諸國等の門戶開放が出來ぬなら滿洲の開放も出來るはずがないと食ひ下り、滿洲についての

三、極東外交論策（英修道氏稿）

さきに國際『軍備縮少問題』なる大著を江湖に贈られ、軍縮の可

米國との衝突を日本に有利に滑算せざりしこと」を遺憾として居られるが、これ等の點は余の無條件に共鳴する所である。少くとも九ケ國條約のプレアンブル中に、日本が嘗て「石井ランシング協定」においてその採じやう地域における特權を約束せられて居たといふ歷史上の事實を記錄的にうたつて置くべきであつた事、更に該條的の有效期間を限定すべきであつた事を痛感するものは、けだし余一人ではあるまいと信ずる。是等を欠くが故に該條約は石井ランシング協定の效果を一片の昔語りとなし、引いては滿洲事變勃發不可避性の一構成要素となつたと認められる。

第四編「文化外交」においてまた多くの卓見を見る。就中、滿洲問題を含む極東外交に對して日本が究極の勝利を獲る方法は、軍事的勢力の背後より、否寧ろそれ等を含む「日本文化（氏はこれをニツポノロジー或はヤマトロジーと英譯したいと提言して居られる）の力に待つ所多い事を示唆されて居るが、この點は雜件の解決に高遠なる理想を說かれたのではなくして、全く卑近なる實行方法を示されたものといはねばならぬ。

然しながら、氏の主唱されんとする「日本の國策―內至「日本主義」が本著中動もすれば略侵的帝國主義を聯想せしむる種々なる術語を以て表明せられて居るが、これに對する氏の主張が佛人のグランド・ポリテイツク、獨人のウエルト・ポリテイークなる概念と略

その軌を一にするものである事は氏自らも認めてをられるのであるから、寧ろ「日本國際主義」とでもいふ新語を以て統一せられたならば、或は氏の抱懷せられる所と合致するのではなからうか。

要するに本著の各部門即ち、第一編極東外交、第二編國際政治、第三編軍縮問題、第四編文化外交、計三十四章に上る大文字は、非常時日本の外交に執り一の清新なる指針たり得るもの、更に現下の日本にとつてもつとも必要と思はれる中庸を得たる帝國主義（氏のいはゆる日本主義の客體）のために理論を與ふるものであり、その意味において、明白の日本外交に對する貴重なる一指南書として、余は本書を廣く推薦する次第である。

昭和十三年五月二十九日　印刷
昭和十三年六月　六日　發行

雄那日本の東亞恢興
定價　三圓二十錢

著作者　三枝茂智　東京市小石川區大塚仲町四十一番地
發行者　島村唯岸　東京市小石川區園口水道町四十六番地
印刷者　和交社　菅成貞吉

發行所　東京市小石川區大塚仲町四十一番地　島村書店　電話大塚二四六〇番　振替東京一一七七三番
賣捌所　東京市神田區表神保町二番地　合資會社　栗田書店　電話神田㈹二六一—四番　振替東京四二八一〇番

大八木製本所

三枝茂智著作目錄

支那の外交及財政	大正十年	絶版 東亞同文會
國際聯盟の活動	大正十二年	絶版 一匡社
國際軍備縮少問題	昭和七年	絶版 新光社
極東外交論策	昭和八年	改訂再版 斯文書院
國際軍備縮少問題	昭和八年	再版 斯文書院
英國反省せよ（共著）	昭和十二年	第一版 ダイヤモンド社
雄邦日本の東亞恢興	昭和十三年	初版 島村書店

第二版